

「思ひ出す事など」一面

— 漱石・修善寺大患の意味をめぐって —

佐藤泰正

漱石の修善寺大患が、その生涯の一時期を画する大きな事件であったことは言うまでもないが、これがその後期文学や後半期の生涯にどのような影響を与えたかについては、種々論議のある処である。そのひとつ——たとえば滝沢克巳は、「小宮豊隆氏を始め多くの批評家が、修善寺の大患によつて、漱石の人と作品とに曾てない重大な転回が齎らされたものと考へ」たことを、「決して理由のないことではない」としつつも、なお読み返すほどに、それは「人の云ふ程に根本的に変化させることはできなかったのだといふ確信を深くせざるを得ない」という。大患における「病床の数ヶ月は謂はば、もともと「事を好まない〔漱石〕の上に落ちた」「小康」であった（「門」二十三）」とし、「彼の肉体がなほそれで『片付く』ことができなかつた如く、彼の精神の不幸も亦、依然として『継続中』であつた（「硝子戸の中」）（「夏目漱石」）という。

さらに正宗白鳥もまた小宮らの説を駁して、大患後の漱石は「前期の彼れよりも、人生の見方が一層温かになり、一層寛大になつた

とは思はれない。却つて反対ではなからうか」という。滝沢氏が晩期の「則天去私」を軸とし、「道草」以後に画然たる変化、成熟を見るに對して、「心」「行人」「明暗」など、漱石晩年の作品に私は、彼れの心の惑ひを見、暗さを見、惱みをこそ見るが、超脱した悟性の光りが輝いてゐるとは思はない」（「夏目漱石論」という白鳥の指摘は明らかに異なる処に立つものだが、なおともに大患を重要な一転機と見る説に對しては、多分の保留を付している点で一致するかにみえる。しかしこの一致とは何か。

漱石の多くの小説に對しては終始辛辣な批判を加えた白鳥も、「修善寺日記」や「思ひ出す事など」には「小説以上の興味を感じた」と言い、小説では「彼れの気持とそぐはないところ」を感じる自分も、大患後の漱石の漢詩を「微吟」しつつ、「この詩人の気持がびつたり自分の気持に合ふのを感じた」（同上）という。さらに「修善寺日記」については、そこに「東洋の達人の諦観の影」（「道草」について）さえ見るといふ。恐らく「思ひ出す事など」についても同様と推測してよからう。滝沢氏もまた「思ひ出す事など」を目して、「修善寺の危い病気が思ひがけず彼に齎した」生への「

「思ひ出す事など」一面 — 漱石・修善寺大患の意味をめぐって —

深い驚きと静かな歓びとの、こよなく美しい記念である」とし、「修善寺の病床」は「謂はば久しきにわたる沙漠の激戦に傷ついた兵士のために用意された、山蔭の涼しいベッドで」あり、彼は「己が身を氣遣はしげに彼を取り圍む人々の手に委ねて」「しばし戦ひの労苦を忘れ」、「甦へる生命の中にとゞ恍惚として」周囲の自然を樂しむことができたという。またこの「幸福に対する彼の感謝と愛惜と」が、やがて「漱石をして『思ひ出す事など』を書き綴らしめた」という。

これはまた小宮豊隆のいう——漱石が大患によってえたものは、第一に「死の問題」であり、第二には「大吐血」による「特別な心境」——一種言いがたき「恍惚状態」であり、また第三には「世の中」の「親切」ということであり、これらすべては漱石のいう「天^{プリウス}賽」につながる、「思ひ出す事など」の基調をなすものは、この「天^{プリウス}賽」への郷愁であった。「夏目漱石」という指摘にもあい通うものであろう。ここに深い「諦観」を見るにせよ、あるいは生への「感謝と愛惜」を見るにせよ、これらの評家とともに「修善寺日記」や「思ひ出す事など」に、漱石の与えられた稀有のひと時の——まさに「天^{プリウス}賽」ともよばれるものの深い影を眺みとり、また作家たる以上に、人としての、その真率なる心境の吐露ともいふべきものへの深い共感を示していることは疑いあるまい。しかし、ここに欠落するものもまた明らかであろう。敢ていえば——それは作家漱石における認識という側面であり、漱石自身がこの稀有の体験を、その「三十分の死」を、どう対象化しつつ捉えたかということであり、さらにいえばその記録（「修善寺日記」）を素材として記した「

思ひ出す事など」を、どう作品として読みきるかということであろう。これは今日にまで至って、なお未了の課題として残されてあるかとも見える。先の大患を境として漱石は変りえたかという問いに還れば、その答えは然りとも、また否とも言いえよう。その仔細もまたこの一篇のエッセイに、しかと書き込められているはずである。

二

大患をめぐる日記は、先ず四十三年六月六日から七月三十一日迄の、長与病院への入院の経緯を語る部分と、この「入院中頃」の「断片」として記されている一連の感想と、さらにこれに続く八月六日より翌四十四年一月二十一日迄の、いわゆる「修善寺日記」を中心とする部分のものがあつた。この一連の日記は先ず——「六月六日（月）内幸町腸胃病院行、雨。／麴町の花屋でみづ／しきあやめを桶にすい／と入れてあつた」——という簡潔な記述にはじまり、以下同月十八日入院に至るまでの一連の記述には、繰返し自然——とりわけ植物に寄せる漱石のしずかな感慨が語られてゆく。たとえば十日より十二日にかけては次のごとく記される。

十日（金）。曇。冷。北縁の藤椅子に倚りて眠る。眼覚むるとき、雨の空微かに破れて、薄き光り木犀の込んだ葉を透して、余の顔を射る。

六月十一日（土）（略）……上富坂を上る右手の広い空地に何といふ木か名の分らないのが、若い軟かい緑りを吹いてゐた。其色は氾めて見たい程美しくかつた。其一本の下に薪が高く積みあげて、括くつた藁の色が見えた。（略）。

六月十二日〔日〕／＼北の縁側の藤の長椅子に寝て庭を眺めてゐる。風吹いて梧桐や桜がぱた／＼と鳴る。／＼薄き藍色の空に二たかたまり程の白雲が出る。其輪廓が暈した様に薄くなつて藍に流れ込んでゐる。秋の空に似たり。／＼勾欄のすぐ前にある芭蕉を臨む。日落ちてからが猶快よし。暗いうちに微かに大きな葉の重なる景色が窺へる。

またさらに、十六、十七日の項は簡潔に次のごとく記される。

六月十六日〔木〕 早強雨の響を聞く。胃腸病院行。入院に決す。雨の儘の葛蒲を見る。

六月十七日〔金〕 坐敷に白百合を活ける。香強し。銅瓶に桔梗を挿す。終日雨。日暮に晴れかゝる。薄シャツにフラネル。

すでにこれらの叙述の語る處は明らかであろう。ここには明らかに「門」の作者が佇ち、その眼差は作中をはなれて、しづかに身辺の日常に向けられる。それは八自然のなかの漱石／＼ともよぶべきしづけさであり、なにごとかを予感するもののみそけさが滲む。武者小路が「それから」を評した——これは「運河」のごとき作品であり、「しかし自分は運河よりも自然の河を愛する」(「それから」に就て)——という言葉を借りれば、漱石は次作「門」のなかで、その八自然の河／＼を下りつつあつたはずである。しかもやがて来る大患という深潭を予期しえようはずはなかつたとしても、そのひそかな予感「門」の作中に、すでに纏綿しつつあつた。あの宗助と御米夫婦のひそやかな日常と自然の推移が、あいからみつつ渾然と流れゆく「門」の感觸を読者は忘れることはできない。いまそこから殆ど地続きに、宗助ならぬ漱石がしづかに歩み出す——拗く

「思ひ出す事など」——一面——漱石・修善寺大患の意味をめぐつて——

ともそういうふうにこの日記は始まる。

「世の中にすきな人は段々なくなりませう。さうして天と地と草と木が美しく見えて来ます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます」——この「こゝろ」執筆直前の書簡(大正三年三月二十九日)の一節が、いまこの時のものであつたとしてもさしたる不思議はあるまい。言うまでもなく当時修善寺の菊屋に逗留中の津田青楓宛のものだが、「金があつてからだが自由ならば私も絵の具箱をかついで修善寺へ出掛たいと思ひます」という、この書中の言葉は後のものながら、ある皮肉な照応を示すかもみえる。漱石におけるこの厭世、厭人の想い——その固有のペシミズムとあいからむ自然への共感はずでに我々に親しい處であり、それはそのまま「修善寺日記」、さらには「思ひ出す事など」へとつながつてゆくわけだが、しかしいまひとつ——先の「断片」に見る、漱石固有の視角をも見逃すことはできない。この「断片」の性格は——「Idealist」としての Ilsen、迂濶突飛なり」という冒頭の一句にも明らかだが、続いて次のごとき指摘が繰返される。

○アル ism ヲ奉スルハ可。他ノ ism ヲ排スルハ life ノ diversity ヲ unify セントスル智識慾カ、blind ナル passion (youthful) ニモトヅク。さう片付かねば生きてゐられぬのは monotonous ナ life デナケレバ送レヌト云フ事ナリ。片輪トモ云ヒ得ベシ。(傍点筆者以下同)

○ life ヲ斯クナラネバナラヌト考フルハ既ニ prejudice ナリ。life ハカクアルモノナリ。

○同時ニ吾人ノ life ハ悉ク自己ノ will デ lead シツ、アラヌ

事モ Fact ナリ。是ヲ Will アリト片付ケ、Will ナシト片付ケ、而シテ我儘ナ Egoism ヲ主張シテ威張り。 Powerless ナ、Pessimism ヲ唱ヘテ悲観スルハ、全ク片眼ナレバナリ。

○放タレルト云フハ一方ニ囚ヘラルト云フ事ナリ

もはや逐一あげる必要もあるまいが、この視角上に小説における人物の形象論や批評論、さらには「近來」の風潮としての「今人崇拜」なるものへの批判などが展開される。その末尾に「○新聞小説ノ運命 ○文晁ノ晝」とあるが、恐らくこの「断片」をつらぬくものは、作家としての己の方法、姿勢へのつきざる反問であり、同時に己の裡なるペシミズムをも深く問い返す、作家固有の眼のしたたかなありようであろう。その△自然の河△を下りゆくもの、その自然過程を過ぎゆくものとしてのペシミズムと、これを問い返す認識者の眼と——いわばこの△即自△と△対自△のあい切りむすぶところに——彼の固有の作品が生まれてゆくわけだが、もとより「思ひ出す事など」もまたその例外ではない。

三

日記——十月二十日の項に、「思ひ出す事など」を書き草平に送る」とあり、また同日付の森田草平宛の書簡には、「毎日送る事も隔日になる事も、或は三四日抜く事も有之候はんも少しは長くつゞく事と存候。長さも内容も不定に候へば」云々とある。修善寺より帰京後十日目のことであり、爾後このエッセイは日記と並行して書きつがれてゆくこととなる。日記は時日の経過とともに簡略となり、最後は来訪者の氏名や体重の記録のみの略記となり、その平明

さのままにいつしか日常の地平に消えさつてゆくかとみえる。そのなかに書きつがれてゆくエッセイが、一見随意、無作為と見えつつ——やがてまぎれもなき作品空間として立ち上つて来る気配は、この日記との対照によってあざやかとなる。

「思ひ出す事など」は忘れるから思い出すのである」(四)という。人間の記憶とはまことに「不愼なもので」あり、その逸すべきことの多きを思えば、「わが病気の経過と、病気の経過に伴れて起る内面の生活とを」「不秩序ながら断片的にも録して置きたい」(同)という。しかし、もとより作者は記憶の不確かさの故にのみ書き急いでいるわけでもなく、またうまく思い出してみようとしないわけでもない。あるなまなましい体感をそのなまなましきままに、しかしその根源より掘り返してみようとしているのだ。あるいはそのすべてを纏みとつていま一度、己の前につきつけてみようとしているのだ。ここにはその不拔の体験をも人生の一挿話となさんとする、したたかな作家の面貌がある。これらの仔細もまた、作者はたしかに作中に語りとつているはずである。

「思ひ出す事など」は四十三年十月十一日、修善寺より帰京し、再び長与病院に入院した処からはじまり、以後ふりかえつて修善寺大患の模様を述べ、三十二章に再び帰京当日の様子を語つて終るといふ——明らかに構成的な展開をとる。歩行もならず「桐油を掛けた」「釣台の土に横へられ」た自分は、あたかも「坑の底に寝かされた様な心持で」(一)あったという。これは後に三十二章では——全体を「白い布で捲いた」「一種妙なものに」身を「横たへた時、是は葬式だなど思った」という部分につながり、叙述は次のよ

うに続く。

此白い布で包んだ寝台とも寝棺とも片の付かないものゝ上に横になつた人は、生きながら葬られるとしか余には受け取れなかつた。余は口の中で、第二の葬式と云ふ言葉をしきりに繰り返した。人の一度は必ず遺つて貰ふ葬式を、余丈はどうしても二返執行しなければ済まないと思つたからである。(三十二)

注目すべき一節だが、これが日記、十一日の項の——「人の考案にて櫛の如きものにて二階を下る。夫を馬車の中へ入れる。浴客皆出見る。櫛は白布で蔽はる。わが第一の葬式の如し」の記述によることは言うまでもない。日記を見返しつつ綴られたこのエッセイの冒頭では、敢てこれにふれず——いやさりげなくふれつつ——終末に至つてこの感慨の重く記されていることは、すでにこの部分がこのエッセイの全体を締括る重要な叙述として用意されていたことを明らかに示すものであらう。「第一の葬式」とは何か。それはあの「三十分間の死」と、そこからの蘇生をのみ指すものか。三十二章の終末は次のごとき言葉をもつて閉じられる。

……更に進んでわが帰るべき所には、如何なる新しい天地が、寝ぼけた古い記憶を蘇生せしむるために展開すべく待ち構へてあるだらうかと想像して独り楽しんだ。同時に、昨日迄低徊した蘆蒲團も、鶉鴒も、秋草も、鯉も、小河も、悉く消えて仕舞つた。

またこれに続いて最後に付された漢詩の一節に——「八万事休時一息回 余生豈忍比残灰」と言い、八漫道山中三月滯 詎知門外一天開」とも言う。すでに明らかでもあらう——日記に「第一の葬式」と記す作者は、ここでは「第二の葬式」と云ふ言葉をしきりに繰り返

「思ひ出す事など」一面——漱石・修善寺大患の意味をめぐつて——

した」という。その志向する処がこれから迎える現実との新たな戦いにあることは、「第二の」という一語にもあざやかであり、待ち受ける「新しい天地」への期待とともに、「昨日迄低徊した」自然のすべては、「悉く消え」さつてしまったという。また八余生 豈に忍びんや 残灰に比するに」と言い、八詎ぞ知らん門外に一天開くをV(漢詩の読下しは吉川幸次郎氏の「漱石詩注」による)とも言う。即ち八山中三月Vの「低徊」的世界のすべてが、ひき括られて、ここに葬られるのである。

すでにかく語る作者の眼は、生への哀惜、諦観、また「生」への感謝の情(岡崎義恵)というには、はるかににがく、それはさらに一か月余の後に記される終章三十三——初出(四四・四・一三)は「病院の春」と題し、読切のエッセイとして扱われている——に至つて、さらに深くアイロニカルな眼として定着される。

除夜の夢は例年の通り枕の上に落ちた。斯う云ふ大患に罹つた揚句、病院の人となつて幾つもの月を重ねた末、雑煮迄こゝで祝ふのかと考へると、頭の中にはアイロニーと云ふ羅馬字が明らかに綴られて見える。夫にも拘はらず、感に堪えぬ趣は少しも胸を刺さずに、四十四年の春は自づから南向の縁から明け放れた。さうして町井さんの予言の通り形ばかりとは云ひながら、小さい一切の餅が元日らしく病人の眸に映じた。余は此一碗の雑煮に自家頭上を照らすある意義を認めながら、しかも何等の詩味をも感ぜず、小さな餅の片を平凡にかつ一口に、ぐいと食つて仕舞つた。

(三十三)

いま「退院後一ヶ月余の今日になつて、過去を一攫ひっつかみにして、眼

の前に並べて見ると、アイロニーの一語は益鮮やかに頭の中に拈出される」と言い、それもまた「あらゆる尋常の景趣は悉く消えたのに、たゞ当時の自分と今の自分との対照丈がはつきりと残る為だらうか」と呟く。この終章末尾に至って、「思ひ出す事など」一篇の主想はあざやかであろう。

「病に因つて」えた「此陳腐な幸福と爛熟な寛裕」とは、また今のあわただしい「現代的気風」にあつてはなお「くつろぎ 払底な趣」であると信ずるが故に、「余は早く思ひ出して、早く書いて、さうして今の新しい人々と今の苦しい人々と共に、此古い香を懐かしみたいと思ふ」(四)と作者はいう。また「われは常任日夜共に生存競争裏に立つ悪戦の人」であり、また「火宅の苦」を避けえざるものなるが故に閑雅なる詩歌の世界は遠く、ただこの病中の閑寂にあつてわずかに戦場の人たるをまぬがれ、「実生活の圧迫を逃れたわが心が本来の自由に跳ね返つて、むつちりとした余裕を得た時、油然と漲り浮かんた天来の彩紋」こそが、この「病中に得た句と詩」であり、「当時の余は此の如き情調に支配されて生きてゐた」と「一瞥の迅きうち」知られれば「満足なのである」という。

その語る処は明白だが、その叙述の背後に行む作者の眼はすでににがい。評家はここに漱石の忘れえざる「天齋」への郷愁が語られ、それこそはこのエッセイの「基調をなすもの」(小宮豊隆)であつたという。だが漱石の得た「天齋」とは何か。むしろ漱石の語らんとする処は、その「天齋」なるものさえもまた一挿話たらざるをえぬ、この実人生の時間であり、彼が生究極の内実とした入意識√さえもまた無化してやまぬ、ある呼びがたきものへの恐れで

ある。言うまでもなくその核は八月二十四日、あの「三十分の死」であり、彼はそれを言いがたき存在の「寒さ」として捉える。このエッセイの核心が十三章より十六章にわたつて書かれる、「忘るべからざる八月二十四日」の出来事にあることは言うまでもなく、すべてはこの核心をめぐつて語られてゆくのだが、作者のこれを目指す筆のはこびはいかにも周到である。

四

先にふれた冒頭第一章に続き、二章ではすでに長与院長の亡くなつていたことが知らされる。妻は「実は貴方に隠して居りましたが長与さんは先月五日に亡くなられました」という。その「容態が悪くなつたのは」自分が「危篤に陥つたのと略同時ださう」だが、してみればその死に近づきつつあつた時、「余は不思議にも命の幅の縮まつて殆んど絹糸の如く細くなつた上を、漸く無難に通り返し」「院長の死が一基の墓標で永く確められたとき、辛抱強く骨の上に絡み付いてゐて呉れた余の命の根は、辛うじて冷たい骨の周圍に、血の通ふ新しい細胞を管み初めた」こととなる。この感慨はさらに翌日——帰京後三日目となるが——ウィリアム・ジェームズの計を知ることによつてさらに深まる。続く三章はそのことを記しているが、漱石は恰度その最後の著作「多元的宇宙」を読みかけて居り、大患の前後に分断して読みついで彼は——九月二十三日の日記に「午前中ジェームズを読み了る。好き本を読んだ心地す」とある——「自分の平生文学上に抱いてゐる意見と」「新しい気脈を通じて彼此相倚る様な心持がしたのを愉快に思つた」という。

漱石とジュームズの関係については、つとに多くの指摘がなされているが、その中心に八意識Vという問題をめぐる、両者の深い関心のあることは周知の通りである。ただ漱石はここで、その「哲学思想が、文学の方面より見て、どう面白いかに詳説する余地がないの」が「遺憾」であると追記しているが、ジュームズのいう「理性主義」を排して「実在」への直下なる参入を説くその志向が、熱い共感をもって読みとられたことは容易に推測できよう。しかし、より重要なことは、ここでその根源なる八意識Vそのものをさす寸断し、無化してやまぬ——あの極限の体験こそが、ここに記されようとしていることであろう。恐らくこのことは、漱石が後章(七)でウオードの思想にふれ、そのいささかの敷衍を試みてはいるが、ジュームズのそれに敢てふれようとしていないことも無縁ではあるまい。

漱石はこの章(三)の終りを、長与院長とジュームズの死にふれつつ、この二人がともに自分の「知らない間にいつか死んでゐた」こと、そうしてこの「二人に謝すべき」自分の「たゞ一人生き残つてゐる」ことの、重い感慨を述べて結んでゐる。かくして続く四、五章にわたっては、先にもふれたこの病中閑雅の所産たる詩句についての感想が述べられ、六章では渋川玄耳より贈られた「列仙伝」——日記では九月二十一日の項に「玄耳より醉古堂劍掃と列仙伝を送り来る」とある——をめぐる記述があり、ここでも「生き延びた余を悦ぶ」感慨が繰返される。

さて続く七章に、ウオードの「社会学」(“Dynamic sociology”) についての考察が展開されるが、書名の「力学的」という言葉にひ

「思ひ出す事など」一面——漱石・修善寺大患の意味をめぐって——

かれて、かねて一読してみたいと思つていたこの大部な著作を取り寄せて読んでみたが、肝心の「力学的」なるものはついにあらわれず「あつけない心持」であつたが、むしろそのなかに興趣を覚えたのは、「宇宙創造論」なるものを述べるくだりであつたという。実はここからがこの章の本題に入るわけで——今自分の感じているこの生への「回復」の喜びも、亡き人々への哀惜も、また周囲の人々への感謝の情も、すべては「人間相互の関係」としては真実だがしかしひとたびこれを宇宙の生成という巨視的な立場から見れば「一時的」の、「ほんの偶然の命」ともいふべく、「種類保存のためには個々の滅亡を意とせぬ」「進化論の原則」よりみれば、「自然は経済的に非常な濫費者であり、徳義上には恐るべく残酷な父母」というほかはない。恐らく「人間の生死」という大事もまたこの視点からみれば、「至当の成行で、そこに喜びそこに悲しむ理窟は毫も存在」しないこととなる。かく述べ来たつて、しかしこの章の見べきはこれに続く次の一節であろう。

斯う考へた時、余は甚だ心細くなつた。又甚だ語らなくなつた。そこで殊更に気分を易へて、此間大磯で亡くなつた大塚夫人の事を思ひ出しながら、夫人のために手向の句を作つた。／有る程の菊^{あひら}投げ入れよ棺の中

言うまでもなく大塚楠緒子を悼む周知の一句だが、この叙述には一種枯屈な何かがある。言わばこの章全体がこの終末の一句の注ともみられるが、文脈よりすればこの章に至る迄のすべてを包括する掉尾の一句ともみえる。楠緒子の死を知った驚きは十一月十三日の日記に見え、十五日——「床の中で楠緒子さんの為に手向の句を作

る」として、△棺には菊抛げ入れよらん程▽△有る程の菊抛げ入れよ棺の中▽の二句が並び、続いて△ひたすらに石を除くれば春の水▽の一句がある。

漱石と大塚楠緒子との関係についてはすでに多くの論者の指摘があり、これらの句についても最近是小坂晋氏（漱石の愛と文学）などの精細な考察がみられ、末尾の一句を含めそのパセティックな表現は、なみならぬ深い悲しみをつたえるかとみられる。しかしここに注目すべきは、この一句がひとたびこの章（七）の末尾に置かれる時、それが「生き甲斐のあると思はれる程深い強い快よい感じ」のする人間関係と、宇宙的单位から見た人の命の果敢なさとを止揚した所で詠まれた句」（高木文雄「思ひ出す事など」の世界）（とも評されるかたちをとっていることであろう。さらに言えばこのパトスは、死者への痛切な哀惜とともに、死と生のあわいに引き裂かれる生そのものの背理への言いがたい激情をも含む。恐らく漱石はここで、この一句の孕む激情の意味を見返しつこの章の末尾に置いたとみえるが、また一面ここに底流する楠緒子への哀惜は、いささか別様の姿をとって後の章にあらわれて来ることとなる。

山を分けて谷一面の百合を飽く迄眺めやうと心に極めた翌日（あくるひ）から床の上に仆れた。想像は其時限りなく咲き続く白い花を葦石の様に点々と見た。それを小暗く包まうとする緑の奥には、重い香が沈んで、風に揺られる折々を待つ程に、葉は息苦しく重なり合った。——此間宿の客が山から取つて来て瓶に挿した一輪の白さと大きさと香（か）から推して、余は有るまじき広々とした晝を頭の中

に描いた。

聖書にある野の百合とは今云ふ唐菖蒲の事だと、其唐菖蒲を床に括けて置いた時、始めて芥舟君から教はつて、夫では丸で野の百合の感じが違ふ様だがと話し合つた一月前も思ひ出された。聖書と関係の薄い余さへ、檜扇を熱帯的に派手に仕立てた様な唐菖蒲は、深い沈んだ趣を表はすには余り強過ぎると思はれなかつた。唐菖蒲は何うでも可い。余が想像に描いた幽かな花は、一輪も見る機会のないうちに立秋に入つた。百合は露と共に摧けた。

三十章の冒頭の部分だが、この叙述が秘められた激情をかいま見せつつ、勁く張りつめた絃のひびきをつたえていることは明らかであろう。この末尾の一句にふれて小坂氏は、「『露』という作品を書いた楠緒子が秋草に置く露と共に消えてしまったという感慨であろう」と述べているが、「摧けた」という一語の孕むひびきは重い。

その死が「病んで死の瀬戸際まで辿りついてまたかへって来た身には、人一倍感慨深いものがあつたのでありませう」とは、鏡子夫人（「漱石の思ひ出」）のつたえる処だが、まさしくこの追悼の一句をつらぬくものは亡き人への痛惜とともに、生への帰還者の死を見返す、その激情のひそかな表白でもあろう。かくして作者はこれをひとつのななじきりとして、「忘るべからざる八月二十四日」（八章冒頭）へと筆を進めてゆくこととなる。

五

さて第八章以下、作者の筆はようやくその核心に迫ってゆくこととなるが、八章に二十四日以前の病状の概略を述べ、愈々「忘るべからざる二十四日の出来事を書かうと思つて、原稿紙に向ひかけると、何だか急に気が進まなくなつたので又記憶を遡^{さかのぼ}るまに向け直して、後戻りを」（九章冒頭）することにしたと言ひ、以下四章にわたつて別のいくつかのエピソードが語られてゆくこととなる。このためらいはことの重さを伝えるとともに、また一見これと無縁ともみえる挿話のすべてが——たとえばこの時の洪水で妻の妹と森田草平がそれぞれ危く死地をまぬがれたこと、それも知らず「遠い温泉の村」に煙霞雲水のごとき生活をしていた自分、しかしその自分もまた「病が次第々々に危険の方へ進んで行つた」（十二）ことも知らず、またその雨の間を笑い騒いで引き上げていった隣室の「裸連」（十二）なるものの動向など——これらのすべてが、続いて記される「二十四日の出来事」の微妙な伏線となつてゐることも見逃せまい。

かくして十三章以下、あの吐血の瞬間の記憶ならぬ記憶が語られるのだが、彼が終始こだわるのは、まさしく自分が九死に一生を得たということの感謝ではなく、その死も生もすべては自分の意識とは全く無縁の出来事であつたという事実である。「強ひて寝返りを右に打たうとした余と、枕元の金盃に鮮血を認めた余とは、一分の隙もなく連続してゐるとのみ信じてゐた。其間には一本の髪毛を挟む余地のない迄に、自覚が働いて来たとのみ心得てゐた」（十五以下同）。しかし「あの時三十分許は死んで入らつたのです」と後に妻から聞いた。自分は「たゞ胸苦しくなつて枕の上の頭を右に傾

むけ様とした次の瞬間に、赤い血を金盃の底に認めた丈である。其間に入り込んだ三十分の死は、時間から云つても、空間から云つても経験の記憶として全く余に取つて存在しなかつた」とすれば、その死とは、また生とは何か。

かくも「俄然として死し、俄然として吾に還るものは、否、吾に還つたのだと、人から云ひ聞かざるゝものは、ただ寒くなる許である」といふ。「門」のそれが、宗助夫婦の「寒さにたへかねて抱き合つて暖をとる」ごとき、その「抱合^{はかひあひま}」の底にも巢くうあの「恐ろしいもの」に由来する——言わば人と人との間の癒すべからざる倫理の問題につながる「寒さ」であつたとすれば、このエッセイの語る処はさらに深い。それは生の根源にあって、その生の内実なる人意識√そのものをも瞬時にして打ち返し、無化してやまぬ、したたかな影なる存在である。ここに彼がドストエフスキイの死刑直前の心理に、執拗にこだわらつづけるのもまた必然であろう。こうして十三章より十六章にわたる「三十分の死」をめぐる記述のあと、十七章より十九章にわたつては生き還つたものの感慨が、たとえば「生れてより以来此時程に吾骨の硬さを自覚した事がない」（十八）というような実感として、あるいは「自然に淘汰せられんとして」なお「病に生き還り」また「心に生き還つた」ものの素朴な感慨の吐露として綴られ、作者の筆はおのずからに二十、二十一章と、ドストエフスキイにおける極限的体験へと移つてゆくこととなる。

彼はドストエフスキイが「死の宣告から蘇へつた最後の一幕を眼に浮べた。——寒い空、新しい刑壇、刑壇の上に立つ彼の姿、襦衣一枚の儘顔へてゐる彼の姿」——それらの「悉く」は「鮮やかな

想像の鏡に映つた」。ただ「独り彼が死刑を免かれたと自覚し得た咄嗟の表情が、何うしても判然映ら」ず、しかも自分は「たゞ此咄嗟の表情が見たい許に、凡ての畫面を組み立て居た」(二十一)という。その体験の違いを思えば当然ながら、にもかかわらず自分には、ただ繰返し「刑壇」上の彼の姿を「描き去り描き来つて己まなかつた」(同)という。明らかに彼の求めんとするものははやドストエフスキならぬ、自身の「表情」である。その一瞬の「表情」こそが、生のあかしであるかのごとく固着しつづけんとするが、なおそれはむなし。

「余は余の個性を失つた。余の意識を失つた。ただ失つた事文が明白な許である。」^{はつきり}「どうして自分より大きな意識と眞合出来よう」

(十七)——ここには宗教的感情なるものから最も遠く、醒めて、にがく、いっさいの出来事にアイロニカルな眼差を投げつづけるひとりの作家の執拗な問いと、そのしたたかな面貌がある。またさらに「余を看護する為に、余の視線の屈かぬ傍らを占めた人々の姿は、余に取つて神のそれと一般で」(十八)あると言ひ、またほとんど前後の文脈とは無縁ともみえる「神に祈つて神に棄てられた子の如く」(十七)といふごとき比喩を弄する。ひとはここにも漱石における、神への一種屈折した距離の取り方、その異和感ともいふべきものを容易に読みとることができよう。しかしまたその背後の、たとえば日記中の次のごとき箇所はどうか。

星のうち恍惚として神遠き思ひあり。生れてより斯の如き假懐を恣にせる事なし。衰弱の結果にや。(九月十九日)

恐らくこの部分は、エッセイに記す——「天養」^{テウヤウ}ともよばれるあ

の「纏綿」たる心境を、ドストエフスキの「神聖な疾」^{やまい}ともよばれる「癩癩の発作」前の至福の状態に比して、ドストエフスキのそれは「病の將に至らんとする予言で」あり、「生を半に薄めた余の興致は、単に貧血の結果であつたらしい」(二十)という部分にあたるものであろう。△自然▽との深い合一の、その「纏綿」たる至福の状態にふれつつ、これを「神遠き思ひあり」という時、恐らくそこにドストエフスキの存在、その△人神▽が想起されていたことは疑いあるまい。「神遠き」とはまた、絶えず漱石のとりつづけたひとつの意識であり、捨てえざる距離感であり、恐らくこれなくして、後期の「彼岸過迄」以後「道草」「明暗」に至るその歩みはありえまい。しかもまたこの志向は同時に、「纏綿」たる自然との合一感、その至福ともいふべき世界をもたえず打ち崩し、これらをすべて一場一刻の桃源境と化して突き出んとするしたたかな志向をも孕む。

果たしてこのエッセイの展開は、これに続く二十二章以下——病者を包む自然や夜の深さを(二十二)、この「干乾びた社会に存在する自分」の「甚だぎこちな」き実感を(二十三)、さらには幼年時の回想や(二十四)、見舞に來た子供たちのこと(二十五)、予後の食餌(二十六)、オイッケンの説く「自由なる精神生活」への反問(二十七)、人相や髻の話(二十八)、修善寺の太鼓(二十九)、百合や秋の草花に寄せる想ひ(三十)などから、兄の回想につながる白髪の話(三十一)、そうして三十二章、修善寺出立の模様を敘し、後に加えた三十三章(「病院の春」)をもつて閉じられるわけだが——一見徹底的な散策と見えつつそこに底流するものは生

活者の、あるいは認識者の抜きえざる体臭であり、すでに「実世間
に押し出され」（二十七）んとする作家の苦渋とひそかな身構えさ
え感ぜられる。それはオイッケンの説く「自由なる精神生活」を駁
する語調にも、あるいは夜陰にひびく修善寺の太鼓の「どんと云ふ
余音のないぶつ切つた様な響」の描写の底にも明らかであろう。

また、たとえば兄の回想につながる白髪の話は、単なる病後の一
層の衰弱への老いの感慨ではなく——「白髪に強いられて、思ひ切
りよく老の敷居を跨いで仕舞はうか、白髪を隠して、猶若い街巷に
徘徊しやうか」という問いのさなかに佇ちつくす一個の生活者の、
また作家の実感であり、もとよりその答えの後者にあることは自明
とみえる。同時にその踏み越えは、あの終末の——「昨日までの低
徊した蘆蒲園も鶺鴒も秋草も鯉も小河も悉く消えて仕舞つた」とい
う一句に収斂され、しかもかくいう時、それはあの作中最も深い郷
愁をこめて語られる少年時の——「的礫と春に照る梅を庭に植へ」
「柴門の真前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く纏ら」（二十四）す
駘蕩たる画境への憧憬をも、併せて消しさるものであり、すでにこ
の「山中三月」の煙霞桃源の世界もまた、画中の一景となる。こ
れを同じ出立の十月十一日の日記に——車窓より見る秋色を賞でつ
つ「秋になつて又来たしと願ふ」と——言わばこの世界を日常と地
続きに捉えているのを見れば、このエッセイの終末に託した作家の
想いは、敢てこれを決然たる行為と見れば、すでに「彼岸過迄」以
後後期文学への展開は、一步の距離にもすぎまい。

さてここで修善寺の大患をめぐる作風の推移とは何かが、たとえ
ば「門」の宗助から、「彼岸過迄」の須永というすぐれて「内部的

人間」（瀬沼茂樹）への変移の意味が問われて来るであろう。恐ら
くそのバネとなつたものは、あの「三十分の死」を存在の寒さとし
て捉え、さらに「アイロニー」として捉える作者の体感、また認識
であろう。あの「三十分の死」において△自然のなかの漱石▽は、
まさしくその極限にあつたと言つてよい。しかしこれを存在の寒さ
として捉え、さらに「アイロニー」として捉えた時、彼はこの△自
然▽の内壁から破り出てゆくこととする。△意識▽の虚しさを問われ
つつ、その故にこそ彼はその、△意識▽の側から打ち返してゆくこ
とする。△自然▽の深潭に身を浸しつつ、しかもなお△意識▽の根
源より問い返しつつけてゆく以外に、作家の認識とは何かと問いた
げである。こうして須永市蔵の登場以後「行人」の一郎も「こゝろ
」の先生もまた△自然▽と△意識▽のはざまに身を寄せつつ、その
断壁をあやうく辿つてゆくこととする。その果ての「こゝろ」の先生
の死は、そのひとつの円環を閉じ、作者はさらに深い認識への旅を
しいられることとなる。

かくして大患はこの後期文学展開への初源の課題を孕み、これを
一語にして言えば△帰来命根を覓む▽の一句につきよう。言うまで
もなく修善寺療養期の作、「思ひ出す事など」のかなめとなる十五
章末尾に置かれた漢詩中の一節である。日記によればこの一句は、
十六日△命根何処来▽、十七日△命根何処在▽、十八日△命根何処
是▽と推敲を重ねつつ、最後に△帰来覓命根▽の定稿となつてい
る。この推敲の過程にも△命根何処▽なりやの漢詩的発想より掘り
込んで——△命根を覓む▽の作家的姿勢への定立に向う——ここに
もこの詩句の重さはあざやかに読みとれよう。

またこの詩篇の後半に見る「高樹獨余枝」の一句も、また、爾後の作品に參む漱石の孤獨な体感をつたえるものだが、この「高樹 獨り枝を余す」のイメージの根底には——「入夜空疑身是骨」(十三章末、十月五日作)、「病骨稜如劍」(二十二章末、九月二十日作)、「殘存吾骨貴」(二十三章末、十月六日作)などと続く「吾骨」のイメージのあることもまた明らかであろう。この「殘存する吾が骨」につながる「高樹 獨り枝を余す」のイメージは、言わば「自然の河」を流れる漱石の抜きえざる体感であり、「帰來命根を覓む」とは、なおその底にあつて存在の根源に問い迫らんとする認識者漱石の不拔の姿勢を語るものであろう。かくしてこの兩者のあいからみ、あいむすぶところに漱石文学固有の展開があり、この後期文学への発端の手がかりを、「思ひ出す事など」一篇の裡に少しくきぐつてみたわけである。従來の論とはいささか別様のアクセントを付してみた理由もまたここにあり、この一篇のエッセイの重さは改めて問い直されてゆかねばなるまい。

付記——この小稿は「国文学」(昭49・11)掲載の拙稿(「自然」のなかの漱石)につながるものだが、同誌上に佐々木雅彦氏の「アイロニーの回廊——「思ひ出す事など」」の一文があり、少しく廻つては清水孝純氏の「「思ひ出す事など」をめぐつて」(「近代文学研究」第2輯、昭48・11)にも「アイロニー」をめぐるすぐれた考察のあることを付記しておく。